

教育委員会月報



文部科学省

Series

地方発! 我が教育委員会の取組

認知や発達の特徴に応じた学びの充実

長野県教育委員会

Ashiya PEACE プロジェクトについて

～ONE STEP! 夢中になって学ぶ楽しさを～

兵庫県芦屋市教育委員会

人事異動あいさつ



2024年8月9日発行 第76巻5号

2024 August





Series 地方発！我が教育委員会の取組

認知や発達の特徴に応じた学びの充実

長野県教育委員会 [1](#)

Ashiya PEACE プロジェクトについて

～ONE STEP! 夢中になって学ぶ楽しさを～

兵庫県芦屋市教育委員会 [5](#)

人事異動あいさつ [10](#)

認知や発達の特性に応じた 学びの充実

1. はじめに

本県では、県内全ての児童生徒が自分らしく学ぶことのできる授業づくり、学級づくりの基盤となる内容を長野県教員育成指標と結び付け、「信州型ユニバーサルデザイン」(図1)として構築してきた。

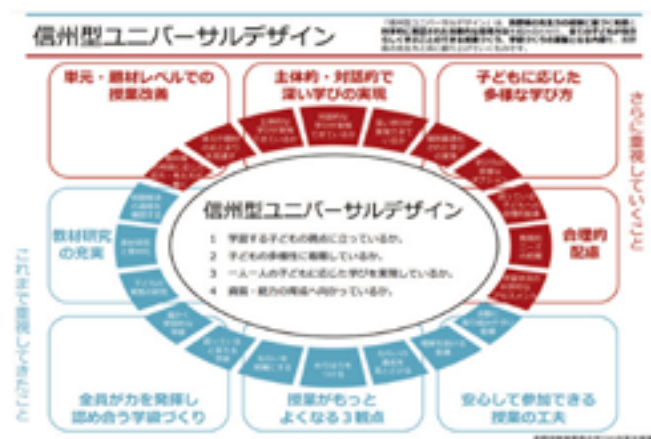


図1 信州型ユニバーサルデザイン

このうち「子どもに応じた多様な学び方」、「合理的配慮」をさらに重視したいと考え、令和5年度から、全ての児童生徒が学びやすい環境を整備、構築することを目指して、全ての児童生徒を包み込む授業のあり方や、個々の特性を把握するためのアセスメント方法等を、実証的に研究する「認知や発達の特性に応じた学びの充実実証事業」に取り組んでいる。本稿では、本事業の取組について紹介する。

2. 令和5年度の取組

(1) 2つのワーキンググループでの取組

この研究での取組を図 2 のように表した。

全ての児童生徒を、以下の 3 つの層でイメージしている。

〈第一層〉 通常の学級での質の高い指導を実施

〈第二層〉 通級指導教室での少人数での補足的な支援

〈第三層〉 特別支援学級等での個別的な支援

下図の大きなVは、全ての児童生徒を表しています【参考】LITALICOジュニア
第一層：通常学級での質の高い指導を実施
第二層：過級指導教室等での少人数での補足的な支援
第三層：特別支援学級等での個別的な支援

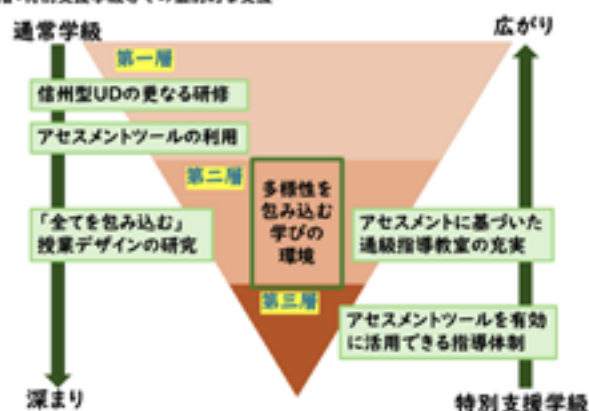


図2 令和5年度の取組のイメージ

また、2つのワーキンググループ（WG）を設置し、それぞれ「学びの充実 WG」と「アセスメント・教材提案ツール活用実証校 WG（以下、アセス WG）」とした。

「学びの充実 WG」は、第一層から第三層に向かうイメージで、主に通常学級における授業改善から、全ての児童生徒を包み込む授業デザインについて研究を進めた。

一方、「アセス WG」では、第三層から第一層に向かうイメージで、主にアセスメント等の活用、通級指導教室の利用などを踏まえながら、学級担任の経験や感覚だけでは気付きにくい一人一人の特性の早期発見や、個別学習で身に付けた力を在籍学級で発揮すること等を目指す姿として、通級指導教室担当教諭と通常学級の担任との連携に視点を当て研究を進めた。

① 学びの充実 WG の取組から

「学びの充実 WG」（小学校 4 校、中学校 1 校の研究校）では、本事業を進めるにあたり有識者から「教

師のマインドチェンジに向けた実態把握の重要性」を指摘された。そこで、オブザーバーである福本理恵氏と（株）SPACE の協力のもと、現状の授業に関する教師の意識調査を研究校で行った。

意識調査の結果から、横軸を「自ら学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整する姿」、縦軸を「知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を身に付け、学びに満足する姿」とし、4象限マトリクスの中に、「教師から見る認知発達特性と授業の困り感の関係」（図3）として表した。

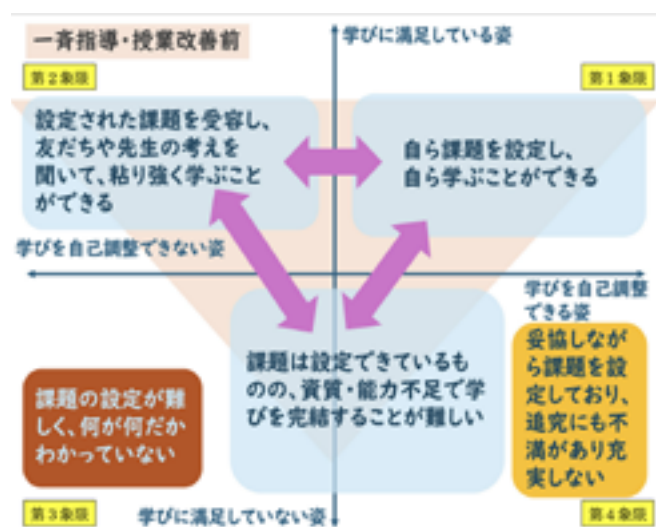


図3 4象限マトリクスで表した「教師から見る認知発達特性と授業の困り感の関係」

図3の三角形のように、一斉指導の授業デザインの範囲に当てはまるのは、児童生徒全体の7割程度と言われており、当てはまりにくい残り3割の児童生徒は、以下のように位置付くのではないかと考えた。

- ・図3の第3象限に位置する児童生徒は、特別な支援が必要である
- ・図3の第4象限に位置する児童生徒は授業内容が自分の能力より簡単で、課題への意欲が高まらず満足できない傾向がある

以上を踏まえて、全ての児童生徒を包み込む授業のあり方について考えていった。

② アセス WG の取組から

アセス WG では、学級担任の経験や感覚だけでは気付きにくい一人一人の特性の早期発見や、個別学習で身に付けた力を在籍学級で発揮すること等を目指す

姿として、通級指導教室担当教諭と通常学級の担任との連携に視点を当てた実践研究を進めてきた。

その際、（株）LITALICO が開発した教育ソフト等、既存のアセスメントツールを効果的に活用し、支援について実践を通して検討を行った。

合わせて、通級指導教室を利用する児童生徒が、通級指導教室で身に付けた力を、通常の学級で発揮するための教師間の連携のあり方等について実践を通して検討を行った。

（2）学校と学校外の連携について

図3の第4象限に特定分野に得意な才能がある児童生徒が表出してくるのではないかと考え、そのような児童生徒のニーズにも応えられるよう学校の枠を越えた「学びの場」として、以下の3つの事業について整理・新設した。

① 信州 Makers キャンプ、Makers 教室の実施

授業で学習したプログラミングやものづくりを、さらに専門的に学びたいと思っている児童生徒を対象に開催。ゲーム制作会社「アソビズム」からプログラムと講師の提供を受け、信州大学教育学部村松浩幸研究室、小倉光明研究室と連携し、長野県教育委員会が主催して計4日間実施。のべ74名が参加した。

② 信州大学ジュニアドクター育成塾への支援

信州 Makers キャンプ、Makers 教室で学んだ児童生徒に対し、大学教授等から専門的な知識を学び、能力を伸長する体系的育成プランであるジュニアドクター育成塾を紹介している。後援、協力という立場で長野県教育委員会が携わっている。

対面・オンラインで月2回のペースで半年間開催。信州 Makers キャンプ、Makers 教室に参加した児童生徒を含め、申し込みが80名あり、選考後50名が参加した。

③ サマースクール、ウィンタースクールの開催

一般社団法人 Education Beyond と連携し、当該法人が主催、長野県（知事部局）及び長野県教育委員会が共催となり開催。

知能が高く学びの習熟が早い子や、好奇心が極めて

高い子（以下、アドバンス・ラーナー）を対象に概ね1か月間、大学生等のチューターが主にオンラインミーティングにて伴走支援し、子どもたちは自身が設定した研究テーマを追究した。

プログラムの初日及び最終日には対面イベントを開催し、参加者同士の交流や研究発表会を実施。サマースクールは県内5名、県外3名の計8名、ウィンタースクールは県内13名、県外2名の計15名が参加した。

3. 令和5年度の成果と課題

(1) 教師のマインドチェンジの重要性

学習指導要領の趣旨の浸透とともに、令和の日本型学校教育の理解も進む中、教師が一方向的に教える授業から、多様性のある児童生徒と共に作り上げる授業へ意識が高まりつつある。しかしながら、その重要性は分かっているものの、いざ授業になると一斉一律の授業になってしまう現状もある。そのため、研究校においては、以下のような取組を進めた。

教師が授業に臨む際のチェックリストや心得を独自に作成し実践を進めたり、例えば、体育の授業において、追究する技や練習メニューを全て児童が計画する授業を共有し、学校全体での研修や授業研究を進めたりしている。

今後の課題は、教師のマインドチェンジに向けて継続的に支援することである。継続的な研修の実施や、各学校での授業研究を進めるため、教師の意識調査を実施し、実態把握を行った。令和6年度にも意識調査を実施し、現状把握を基により効果的な研修や研究を構築できるように進めていきたい。

(2) アセスメントツールの活用

学校には小さなSOSを出したり、それもできずに静かに困っていたりする児童生徒がいる。しかしながら、その支援は、担任教諭や担当教諭の力量に頼る傾向がある。そのため、学校全体で既に使用しているスクリーニングに応じたアセスメントツールを活用した支援方法について研究した。

具体的には、教師が児童生徒のSOSをどのように共有するかを示すフローを設計し、必要な場合にはサポートチームが対応する仕組みを構築した。

その結果、教師が感覚だけでなくアセスメント結果を活用することで、児童生徒の情報共有がスムーズになり、教師全体で協力しやすい体制につながった。また、民間フリースクールとの連携もしやすくなってきている。

今後の課題は、教師の負担を軽減しつつ、児童生徒が自分自身を理解する手助けとなるよう、アセスメントを活用していくことである。アセスメントを広範囲かつ精緻に実施することは理想的であるが、教師の負担が大きいという課題がある。そのため、簡易なスクリーニングとアセスメントを組み合わせ、学校全体で実施できる方法を検討していきたい。

また、中学校では、(株)SPACEと連携し、全ての生徒が自己理解のためにアセスメントを活用する取組を進めていきたいと考えている。生徒が自分の特性や学び方の傾向を理解し、それを意識しながら、生涯に渡って学び続けられる素地をつくる取組を進めたい。

(3) 学校外での学びの場について

アドバンス・ラーナー向けサマースクール、ウィンタースクール実施後の参加者アンケートでは以下のような感想が見られた。

- ・ 実験、試行錯誤、調査、仲間からの刺激等を通して、普段の学校環境では実現されにくい知的好奇心を深掘りできた。
- ・ 同じような仲間の存在や広がりを感じ、自然体、等身大の自分での居場所が確認できた。

県教育委員会が積極的に関わることで、サードプレイスの重要性や他機関との更なる連携について発信できた。また、一定の参加ニーズがあることも確認できた。課題としては、アドバンス・ラーナーに係る理解が不足しており、学校外での学びの場に関心はあるものの参加申込に至らないケースが相当数あった。今後は、周知の向上にむけた情報の発信を工夫していく。

(4) リーフレット（1年目暫定版）の作成

令和5年度の1年間の取組をリーフレットにまとめ、県内の市町村教育委員会、小学校、中学校、義務教育学校、特別支援学校に配布するとともに、長野県教育委員会のホームページにも掲載し成果を発信している。

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyogaku/kyoshokuin/shiryo/ninchihattatu.html>

4. 令和6年度の取組

令和5年度の取組から、授業に関する教師の意識を把握しながら、マインドチェンジに向けて継続的な研修を実施し、授業改善の研究を進めていくとともに、簡易なスクリーニングとアセスメントを組合せ、学校全体で取り組める方法を考えていく。特に、中学校では、生徒が自己理解のためにアセスメントを活用し、自分自身の特性や学び方の傾向を見える化し、自分の特性や学び方を意識しながら学習を進めていく実践等を通して、全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現（図4）に向けた研究を進めていく。

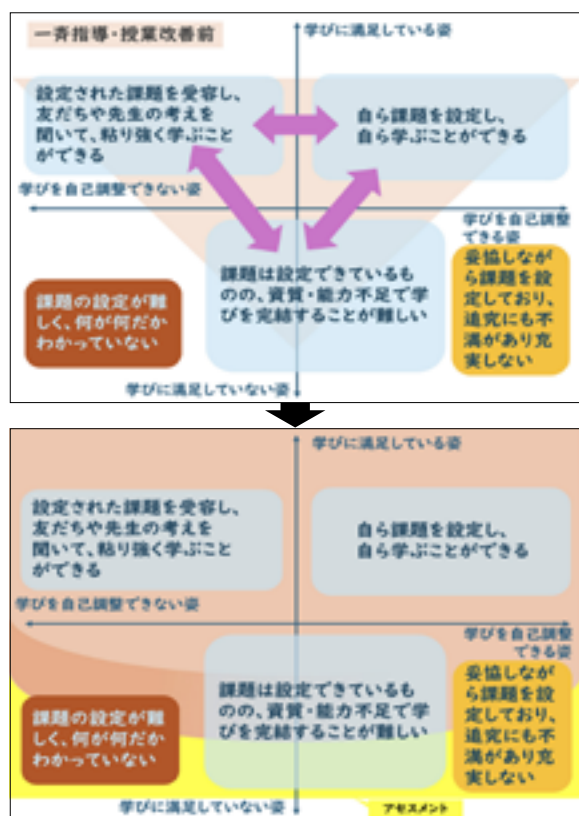


図4 全ての児童生徒を包み込む授業デザインの実現のイメージ

また、特定分野に得意な才能のある児童生徒のニーズにも応えられるようサードプレイスとしての学びの場をより広く周知できるよう、情報の発信方法等を工夫していく。

5. おわりに

令和6年度は、全ての児童生徒を包み込む授業デザインに向けて、アセスメント等を活用しながら通常学級での学びの充実に向けて研究を進めていく。第1層（全ての子どもを対象とした質の高い指導を実施）を広げ、第2層（少人数での補足的な支援）、第3層（個別的な支援）の部分を縮小させていくとともに、学校外での学びの場も位置付け（図5）、全ての児童生徒にとって学びやすい環境となるよう本事業を推進して参りたい。

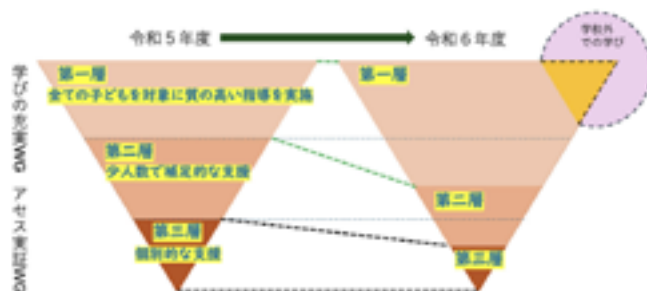


図5 令和6年度 本事業推進のイメージ

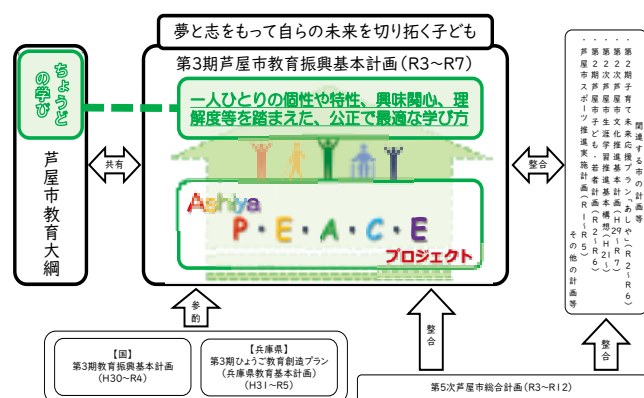
Ashiya PEACE プロジェクトについて

～ONE STEP！ 夢中になって学ぶ楽しさを～

1. はじめに — 教育の最上位目標 —

教育の最上位目標は何でしょうか？

芦屋市教育委員会は、子どもたちの多様なニーズに応え、「自ら未来を切り拓く力を身につける」ために「Ashiya PEACE プロジェクト」を推進しています。本プロジェクトは、第3期芦屋市教育振興基本計画に基づき、子どもたちが何より“安心”（PEACE of mind）して学ぶことをベースに、「自ら進んでチャレンジしていく環境を共に作り出していく」ことを目的としています。つまり、最上位目標としては「自ら未来を切り拓く力を身につける」「自ら進んでチャレンジしていく環境を共に作り出していく」ということと捉え、以下では、このプロジェクトの具体的な取り組みとその背景にある教育方針について詳しく紹介します。



2. Ashiya PEACE プロジェクトの背景 — なぜ、P・E・A・C・Eなのか —

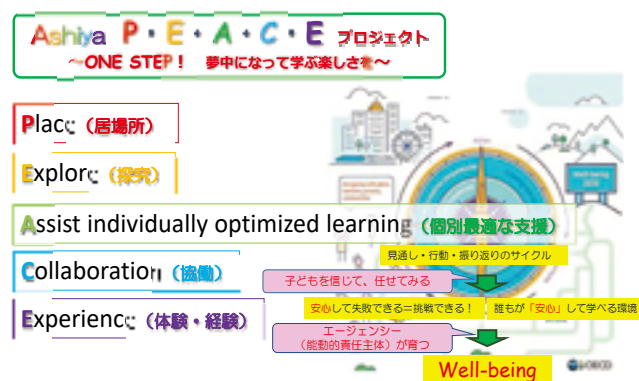
いじめや不登校の課題は本市も全国と同じような状況であり、令和5年度の不登校率は小学校 2.41%、中学校 7.96%、いじめ認知の件数は小学校 1,515 件、中

学校 118 件と看過できない状況が依然続いています。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響は否めませんが、約 150 年前から続く全員一律、画一的な教育システムから脱却し、個々のありのままを認め、多様な個性を尊重する教育への転換が求められていると考えています。本市教育委員会は、どの子にとってもまずは、学校園が“安心”して過ごせる場所でありたいと考え、子どもたちの本能的欲求（知りたい欲求、つくりたい欲求、コミュニケーションしたい欲求、表現したい欲求）を大切にしながら、“対話”を通じた最適な支援を行っています。

3. Ashiya PEACE プロジェクトの概要 — いじめ・不登校にも向き合いながら —

“安心”“対話”をキーワードとした Ashiya PEACE プロジェクトは、以下の 5 つのコンセプトから構成されています。



(1) Place (居場所)

すべての子どもたちにとって安心できる居場所を提供します。学校園が安心して過ごせる場所であることを重視し、個々の特性に応じた学びの場を提供します。

例えば、集団が苦手な子どもには、個別に学ぶ場を用意し、子どもたちが自分のペースで学べる環境を整えています。具体的には、「のびのび学級」や「わくわくルーム」など、様々な支援が必要な子どもたちに対する教室を設けています。

(2) Explore (探究)

子どもたちが主体的に学び、身の回りの社会や自然に対する疑問を追究する過程を大切にします。子どもたちの「知りたい」という欲求を尊重し、自ら立てた課題を追究することで、深い学びを実現します。探究活動を通じて、子どもたちは課題解決能力やクリティカルシンキングを養います。例えば、フィールドワークやプロジェクト型の学習を通じて、実際の社会（地域）とつながったり、自然の中で学んだりする機会を提供しています。

(3) Assist individually optimized learning (個別最適な支援)

子どもたち一人ひとりの特性やペースに応じた支援を行います。例えば、特定の環境が苦手な子どもには、その子に適した学習環境を提供しています。また、自ら立てた目標や計画に基づいて学ぶことを支援し、個々の学びを最適化しています。特別支援教育の充実も図り、特別支援コーディネーターの研修を通じて専門性を高めています。



(4) Collaboration (協働)

一人では解決できない課題に対して、仲間や教師と協力して取り組む力を育みます。協働を通じて、他者

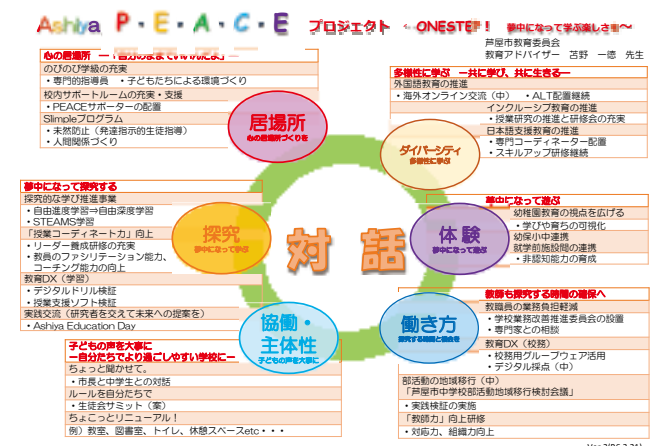
とつながりながら学ぶことの大切さを学びます。これにより、コミュニケーション能力やチームワークが自然に身に付きます。例えば、グループ学習や協働プロジェクトを通じて、他者と協働しながら学んでいく学び方を養うことを大事にしています。

(5) Experience (体験・経験)

子どもたちが夢中になって学び、遊び、失敗や成功を経験することを重視します。これにより、挑戦心を育み、これからの複雑で予測困難な未来を切り拓く力を養います。実際の体験を通じて学ぶことで、理論だけでなく実践的なスキルも身に付けます。例えば、地域との連携によるボランティア活動や職業体験など、多様な体験学習の機会を提供しています。

4. プロジェクトの具体的な取り組み — マニュアルではなく、ビジョンを示す! —

子どもたちだけでなく、教職員、学校園にもエージェンシーの育成を求めているため、本市教育委員会としてはマニュアル、〇〇方式や〇〇スタンダードを示すことはせず、各学校園、各教職員の内発的な改善意欲を引き出すことを大事に、ビジョン、コンセプトの共有化、まずは“安心”をベースとした取り組みが根付いていくよう“対話”を繰り返しながら進めています。



(1) 居場所の提供

① のびのび学級（適応教室）

子どもたちが自分で学習計画を立て、自分のペースで学べる環境を提供しています。例えば、「わくわくルーム」では、仲間と協力して課題に取り組む活動が行われています。ここでは、子どもたちが互いに教え合い、支え合うことで、自然と協力する力が身につきます。

②校内の居場所

教室以外でも学べる環境を整備し、自分のクラスに入りにくい子どもにも対応しています。これには、校内サポートルームや図書室、特別支援教室など、多様な学びのスペースが含まれています。子どもたちは、自分がリラックスできる場所で安心して学ぶことができます。

(2) 教員の働き方改革

①校内組織の活性化

何より改善は校内の対話により推進されるべきであり、学校行事や授業カリキュラム、通知表等、「そもそも何のために」と本質を教師間で問い合う“対話”の場を大事にし、改善の核となるよう勧めています。

②学校業務サポーターの活用

文部科学省の通知に基づき、学校徴収金の管理や授業準備の補助など、教員の負担を軽減するためのサポート体制を強化しています。これにより、教員が教育に専念できる環境が整備されています。

③デジタル採点システムの導入

中学校における教員の負担軽減を図るため、デジタル採点システムを導入しています。これにより、採点作業が効率化され、教員はより多くの時間を子どもたちとの対話や個別指導に充てるできるようになりました。

平均超過勤務時間の経年変化

主幹教諭・教諭

	H30⇒R5
小学校	△10:05
中学校	△15:18

教頭

	H30⇒R5
小学校	△3:32
中学校	△20:39

※△は減

(3) ダイバーシティの推進

①インクルーシブを目指した特別支援教育

特別支援教育コーディネーター研修を実施し、多様な教育ニーズに応じ、その先の進路、地域でどう生きていくかも踏まえた柔軟な支援を提供しています。特別支援教育センター主催の研修会を充実させ、学校現場からの声を反映したテーマで開催しています。これにより、特別な支援が必要な子どもたちへの理解が深まり、より適切な支援が行われるようになりました。

②校則の見直し

子どもたち自身が当事者意識をもって自ら学校生活をより良いものにするために、学校規則の見直しも行っています。子どもたちの声を反映し、自分たちで話し合い、決定することで、主体性を育むとともに、より良い学習環境を整えています。

(4) 非認知能力の育成

本プロジェクトでは、いじめ、不登校の予防としても非認知能力の育成にも着目しています。これは、幼児期からの体験の積み重ねを通じて、子どもたちの自己肯定感や社会性、我慢強さ等を育むことを目指しています。例えば、幼稚園教育では、遊びや協働作業を通じて、友だち同士の協調性や問題解決能力につながる資質・能力を育てています。

(5) デジタル技術の活用

これからのAIの進化に対応するリテラシーを育成するために、デジタル技術の活用も、本プロジェクトの重要な柱の一つです。例えば、ICTを活用した授業やデジタル教材の導入により、子どもたちの学びを多様化し、個別最適な学習環境を提供しています。また、オンライン学習の機会を増やすことで、子どもたちは自宅でも学びを継続できるようになりました。

(6) 探究的な学び研究推進チーム「ONE STEPpers」

これまでの研究推進校を指定してきた体制をやめて、市内の教職員挙手制による研究推進チーム

「ONE STEPpers」を結成し、各校の子どもたちの実情に応じた探究的な学びを研究しています。

これまでの研究推進事業とは違い、「探究的な学び」に関心の高い教職員が自らの意思で集まり、協働しながら研究を推進する仕組みとなっています。

芦屋市の子どもたちの「学習意欲」や「協働性」、「自己肯定感」や「学校生活の充実感」を高める研究を進めています。



5. おわりに

— 1に“対話”、2に“対話”、3、4がなくて、5に“対話” —

本市教育委員会が推進する Ashiya PEACE プロジェクトは、多様な個性を持つ子どもたち一人ひとりに最適な学びの場を提供し、子どもたち一人ひとりの成長を支えることを目指しています。第3期芦屋市教育振興基本計画に基づき、学びの質の向上、学校園の魅力と信頼の向上、家庭・地域との連携強化を図りながら、安心して学べる環境を整えています。このプロジェクトを通じて、芦屋市の子どもたちは、自分の興味や関心を追究しながら、主体的に学び、未来を切り拓く力を育んでいます。今後も、子どもたちの多様なニーズに応え続け、持続可能な教育環境を提供するための取り組みを進めていきます。

本プロジェクトは、今後の教育イノベーションへの視座であり、子どもたちや教職員のエンジェンシーを育むものであります。多様な学びの場を提供し、子どもたちと共に well-being を追求する本プロジェクトは、未

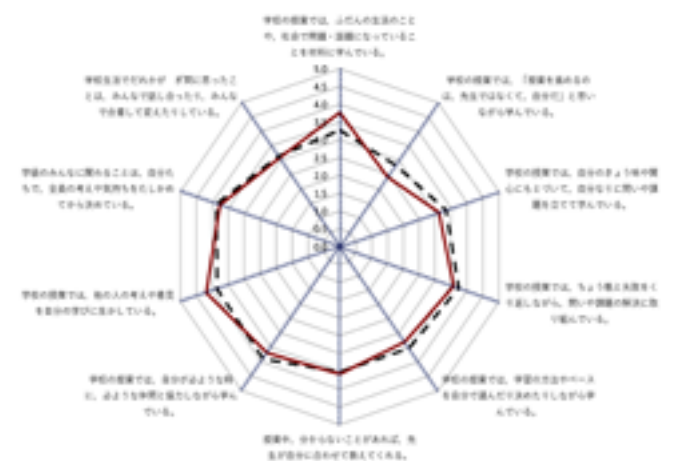
来の社会を担う人材育成に大きく寄与するものと期待されます。「1に“対話”、2に“対話”、3、4がなくて、5に“対話”」と各学校園、各教室に“対話”の文化をインストールしながら、これからも子どもたち、保護者、教職員、地域と共に“対話”することを中心に据えながら、教育の質をさらにアップデートさせていきます。

トピックス1 ScTN質問紙調査

ScTN 質問紙とは、一般社団法人 School Transformation Networking が提供する主体的・対話的で深い学びのための意識・実態調査質問紙であり、児童生徒が自己評価をするものです。

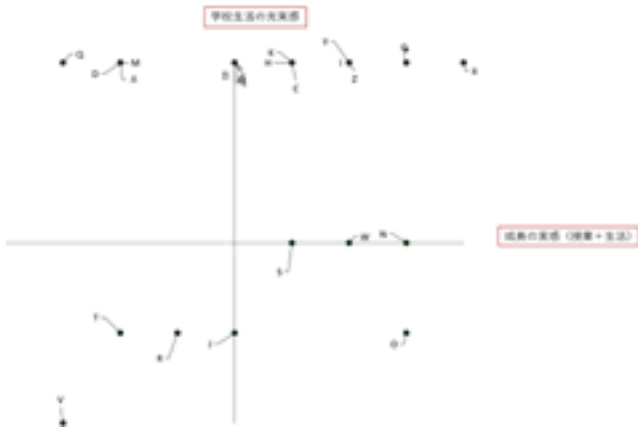
各学校（クラス）の「探究的な学び」「個別最適な学び」の実現状況を考察し、授業づくりや学級経営の共通指針として活用しています。

以下に示すのは、調査結果をレーダーチャートで示したものです。点線で示しているものが芦屋市の平均値であり、実線で示しているものが、各学校（クラス）の結果です。芦屋市全体の平均値を併せて示すことによって、各学校（クラス）の「特徴」を捉え、改善点の優先順位を決定したり、なぜその観点が低い（高い）のかを分析したりする一助としています。



また、個別の状況を散布図でも示しています。この散布図では、学校生活での「成長実感」と「充実感（楽しさ）」が一人ひとりプロットされます。散布図の右上に配置されている子どもは、「学校は楽しく成長できる場所だ」と感じています。散布図の左下に配置され

ている子どもは、「学校は楽しくなく、成長できる場所でもない」と感じています。担任は、この散布図を参考にすることによって、支援が必要な子どもを見出し、クラスの状況を確認したりすることができます。



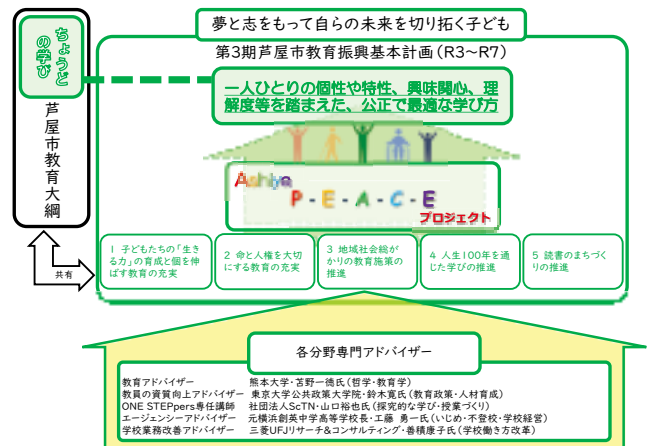
トピックス2 PEACEサポーター

小・中学校において、教職員と連携しながら、不登校児童生徒の個々の状況を踏まえ、学習や生活に関する支援を行い、校内サポートルームの環境整備や欠席者への支援を行うために、PEACE サポーターを各学校へ派遣しています。



トピックス3 各分野専門アドバイザー

「一人ひとりの個性や特性、興味関心、理解度等を踏まえた公正で最適な学び（ちょうどの学び）」の実現に向けて、教育アドバイザーとして熊本大学大学院教育学研究科准教授の苫野一徳先生をはじめ、各分野の専門アドバイザーの助言を受けながら、本プロジェクトを進めています。



芦屋市教育委員会 Ashiya PEACE プロジェクト

<https://www.city.ashiya.lg.jp/gakkoukyouiku/ashiyapeaceproject.html>



人事異動あいさつ



初等中等教育局
初等中等教育企画課長
ときわぎ ゆういち
常盤木 祐一

4月1日付けで、初等中等教育企画課長を拝命いたしました。

子供たちを巡る状況には様々な課題が山積しており、教育界が一体となってその解決に向けて取り組んでいく必要があります。

私もその一員として、教育委員会、学校の皆様をはじめとする関係の方々との連携を深めつつ、職務に全力で当たる所存です。

引き続き、御指導・御鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



初等中等教育局
教育課程課長
むとう ひさよし
武藤 久慶

4月1日付けで、教育課程課長を拝命しました。これまで、初中教育分野では、教育課程企画室企画係長、北海道教委（教育政策課長、義務教育課長、学校教育局次長）、教育制度改革室長補佐等を経験し、前職では GIGA スクール構想の総括や生成 AI ガイドラインの策定等を担当してきましたが、本当に多くの先生方に助けて頂きました。教育行政現場、学校現場と対話しながら政策を創るのが私のスタイルです。今回は 10 年に一度の学習指導要領の改訂という大仕事に取り組みます。ご指導・ご鞭撻・ご支援のほど、何卒よろしくお願いいたします。



初等中等教育局
児童生徒課長
ち ぢ い わ りょうえい
千々岩 良英

4月1日付けで、児童生徒課長を拝命いたしました。前職では、初中局企画官として、初中局内全体の調整業務などを担当させていただいておりました。

令和4年度の全国の小・中学校の不登校児童生徒数は、約30万人で過去最多となり、また、いじめの重大事態をはじめ、生徒指導上の諸課題への対応が、学校内外で求められております。各学校や教育委員会において、様々な取組が進められている中、児童生徒課としても、各現場での取組をしっかりと勉強させていただき、その上で、国として必要な予算の確保や制度的整備等に取り組んでまいります。

生徒指導提要にもありますように、事後対応型のリアクティブな生徒指導とともに、積極的な先手型のプロアクティブな生徒指導、この両軸の取組を進めていければと思っております。引き続き、御指導、御鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



**初等中等教育局
幼児教育課長**

まえだ ゆきのぶ
前田 幸宣

4月1日付けで、初等中等教育局幼児教育課長を拝命いたしました。

2001年の入省以降、初等中等教育局で勤務するのは5回目となります。

これからの我が国社会や世界を見据えたとき、多様性と包摂性というのが、幼児教育の中でひとつの重要なキーワードになってくると考えています。子どもの未来は無限大です。子どもが自分自身の可能性を信じることができること。その基盤を培うのが幼児教育であり、国と地方、教育現場とが一緒になって、その振興を図っていくことが大事だと考えます。そのために全力を尽くしてまいります。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。



**初等中等教育局
特別支援教育課長**

うぶかた ゆたか
生方 裕

4月1日付けで、初等中等教育局特別支援教育課長を拝命いたしました。前職の特別支援教育企画官からの異動です。

これまでは、特別支援教育課をはじめ、初等中等教育企画課、財務課、児童生徒課など、主に初等中等教育行政を担当してまいりました。

障害のある子供の自立と社会参加を見据えて、個々の教育的ニーズに応じた連続性のある多様な学びの場の整備を進め、いずれの学びの場においても、障害のある子供と障害のない子供が可能な限り共に学べる環境整備に全力を尽くしてまいりますので、引き続きのご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



**初等中等教育局
学校情報基盤・教材課長(命)
学校デジタル化プロジェクトチームリーダー**

てらしま しろう
寺島 史朗

4月1日付けで、学校情報基盤・教材課長を拝命いたしました。これまで、初等中等教育分野の仕事を多く担当してきましたが、文字通り初等中等教育局の所属となるのは、平成23年以来、実に13年ぶりとなります。

GIGAスクール構想の推進をはじめ、学校の情報基盤の整備、情報教育の推進、校務DX、先端技術を活用した学びの変革など幅広く学校のデジタル化を担当します。この分野は変化が早く、また注目度も高い分野です。全国の教育委員会の皆様をしっかりとお支えし、ICT機器を活用した子どもたちの学びが充実したものとなるように、日々前向きに、全力で取り組んでまいります。

ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



初等中等教育局
主任視学官

たむら まなぶ
田村 学

4月1日付けで、初等中等教育局主任視学官を拝命しました。これまで新潟県公立学校教諭、新潟県柏崎市教育委員会指導主事などを経て、平成17年4月から平成29年3月まで初等中等教育局教育課程課教科調査官、視学官などを務めてまいりました。また、平成29年4月より國學院大學人間開発学部教授として教員養成の仕事に携わってきました。

実際の社会で活用できる資質・能力の育成に向けて、一人一人の子供が学びに向かう授業と豊かなカリキュラムの創造が求められています。確かな学びの実現に向けて、教職員の皆様が力を発揮できるよう、微力ではありますが努力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



初等中等教育局企画官(命)
初等中等教育企画課
小学校連絡調整官

あさはら ひろこ
浅原 寛子

4月1日付けで、初等中等教育局企画官を拝命いたしました。これまで、初等中等教育分野では、財務課、滋賀県湖南市教育委員会やOECD事務局への出向、学力調査室長、教育課程課外国語教育推進室長などを経験してまいりました。

世界に誇る日本の教育がよりよいものとなりますよう、そして、子供たち一人一人にとってよりよい教育環境となりますよう、大変微力ではございますが、尽力してまいります。皆様方からご指導・ご鞭撻を賜ることができましたら幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

心のふるさと

私が霞が関に赴任してから、地方から関東の大学に進学した大学生の教え子たちと会う機会があった。その中の一人がこんな話をしていた。

「この前、久しぶりに巣鴨に行ってきました。とても懐かしかったですよ。」

21歳の彼がどうして巣鴨を懐かしがるのか、その理由を聞いてみると、小学6年生のときの校外学習がきっかけだったようである。当時の商店街の方々との出会いがあったからとのこと。初めて訪れる東京での緊張感ある活動であったこと、当時出会った商店街の方々の「おもてなしの心」に感銘を受けたこと、そして接客する際にお客さんがまるで本当の孫のように福島から来た自分を受け入れてくれたこと等、複数の要因が重なり、今でも当時の体験は思い出深いものだと話していた。今でも関わったお店の方々に会いに行くことも多いと言う。そして、次のようなことも話していた。

「僕のふるさととは福島ですけど、ある意味でここも（東京も）ふるさとです。」

今思えば、当時、私が勤務していた福島県内の学校では、学校から目的地までの放射線量を事前に測定し、管理職や保護者に「学習の目的と安全性」を十分に説明した上で校外学習を実施することもあった。誰もが不安な中で、子供の豊かな学びを支援しようと、当時一緒に勤務した同僚たちと今後の福島について夢を語りながら、試行錯誤していた日々を思い出す。

私が育ったふるさとの街並みや景色は、東日本大震災後に大きく変わってしまったが、福島で出会った人とのつながりは変わることなく、その方々と会うたびにふるさとを感じる自分がある。そして、霞が関に来てからも、福島に出向されていた文部科学省の先輩方や福島に縁のある職員の方々と思い出話をするたびに、ふるさとを感じる瞬間がある。

東日本大震災後、初めて福島を離れてから10か月。教え子の言葉に、今の自分を重ね合わせるわけではないが、霞ヶ関での人との出会いを楽しみ、全国の子供たちや教育関係者の皆様の思い浮かべながら、自分が納得できる仕事ができるよう試行錯誤していきたい。そして、そのような営みが、自分にとって新たな「心のふるさと」を創ることになるのだろうと確信している。

(T.W)